県立広島大学人間文化学部紀要　13，114-122（2018）

**Abstract**

# "Ikoku-Gatari" by Jipposha Ichimaru
## —Republication and Bibliographical Introduction —

Ryota TAKAMATSU & Classic Reading Society

This paper is a republication and bibliographical introduction of "Ikoku-Gatari" as achievement of Classic Reading Society which carry out voluntarily every other Thursday. "Ikoku-Gatari" is a "Hanashi-bon" which was published by Jipposha Ichimaru who allegedly originated from Hiroshima region, in the last days of the Tokugawa Shogunate. This book is an imaginary travel literature, consisting of three comic stories, and was influenced by previous works as typified by "Wasobei". I expect this republication to contribute to research into Jipposha Ichimaru.

【十ウ・十一オ】

## 其三

さてかのおんない、けるやうは、そなたさまのびんぼうとやらをごでんじゅ申うけたいと、おっ、けだんながみへ升といふにぞ、此上また、ひだるひめをさせてうれしがり、びんぼうのでんじゅのとは、さても〳〵ねんのいった唐人め。はなをあかせてくれんと、かのおんなにちゃをたのみ、そのまにぬけみちやあると、そこらみまはせば、青貝のはしごだんあるにぞ。これさいわいと、のぼってみれば、爰にてんのたすけか、こくうせんとて、くうをはしる船のあるをみつけて、引ずりいだし、そこらにあり合ひのたからをひらひこみ、一しんに日本の神ほとけをねんじて、帆ぶくろを打ひらけば、おりふし順風にて、日あらずふるさとへもどり、さっそくかの和そうべいかたへきたり、いさいをはなす。

和「イヤきさま、ついでのことに、自ざいこくへしりをすへればよいに」

【十一ウ・十二オ】

そ「イヤ〳〵尻をすへたら、けっくなんぎするでござろふ」

和「ナニあっちへ尻をすへてなんぎとは」

そ「またからけつになり升」

めでたし〳〵。

十方舎一丸画作

【十二ウ・後見返し】

【八ウ・九オ】

トいへば、唐人ふきだし、
「ワハ、、、、、、キヤハ、、、、ヨホハ、、、、、、、。ヤーコリヤ、はらがさけるよふな。テモさても、それはまことでござるか。アハ、、、、ハ、、、、、、それは〳〵うら山しや。そのやうな不自由が、しゃうがいに一度してみたい。マア〳〵、それは大かたびんぼうがみどの、御しんるいであろふ。さいわい、こちの親かたへ引あはせてよろこばせ申たし。わたしについて、コウ御出なされよ」といふに、惣六してやったりと、こゝろよろこび、かの毛唐人にしたがひ、ろうもんのうちへいってみれば、ひろくけっこうなること、ゑにかいたりうぐうの禁城か、極らくの体相のけっこうにも百だんまさりて、きらめきわたるにぞきもをとばし、あきれをさまし、だん〴〵奥へとふるト、かの男は惣ろくを一ト間のけっこうなるところへまたせ置、主人へかくといゝいるゝと、ソレハちんきゃく。かたじけなし。さらばはいゑつせんと、ゐふくをあらため、出迎へパア〳〵、こなたへ〳〵ト、おくふかくつれゆき、ギヤマンのしゃうじをひらき、上座のきよくろくの上に、みたこともなきけっこうなるふとんをしき、むりやりにこのうへゝすはらせ、香をたき、しゃ

【九ウ・十オ】

（ひとりごと）「めしをくはさぬから此船でくうへあがるのだ。エンサア〳〵ギイ〴〵〴〵」

うじをメきり、たにんのでいりをかたくとゞめ、此いへばかりびんぼうせんとのはかりこと。惣ろくはがてんゆかず、かりてきたねこか、またやろうの木魚みたやうに、ふとんの上にまかりすはって、まてども〴〵たれもこず。ハゝア、おふかた百味のおんじきとやらに、きりんのころいり、ほうわうの吸もの、からじゝのすっぽんだき、人魚のさしみなどだすであろふと、まてども〴〵ちゃひとつのまさず、でるものはせつなべとあくびばかり。のびたりちゞんだりしてまつ所へ、パタ〳〵〳〵トあし音がするゆへ、ちやっとひざを直してまつ所へ、天人のよふなるおんな、こがねのちゃわんに何やらんもりてもちきたり、これひとつめされよと、玉のぼんにのせていだすを、こたへかねて引たくり、これをくらふに、うまきことかぎりなし。もとよりすきはらなれば、三くちばかりにかきこんでしまひ、またちゃわんをいだせば、かのおんなうちわらひて、女「アノ、もふおかはりはならぬわいな」
惣六「なんでなりませぬ」
女ヲチ「アノヲホ、、、、長じゃ二はいなし」

【五ウ・六オ】

（惣六）「ハヽア、これがかねのなる木だ。これがほんのやまぶ木〳〵」

くじゃくが曰「わしらはくじゃくといはれても、くがないから、らくじゃくじゃ」

【六ウ・七オ】

つるがいふ「此国のつるは千両、かめは万両じゃ。パア〳〵」

（惣六）「アノ福だいこくとは、大かたこの国のことでござりませふ。しかしゑびす、小判はおそれやすね」

そこらをきょろ〳〵とみまはすうち、あるいへより、きんらんどんすを身にまとひ、りっぱなる下おとこの毛唐人。ちんきんぼりのとぶふばこさげて出たるが、かど口にて惣六を見つけ、にはかにうろたへて平ふくしけるにぞ。惣ろくがてんゆかず、にげんとするを引とゞめ、

【七ウ・八オ】

此親だま曰「なんむん。びんぼん。がんみん。さんまん。パア〳〵」

唐「キンツルテンツルバア〴〵〴〵」

トていねいにじぎし、さてあとは日本ことばにていゝけるは、

「こなたさまはきゝおよぶ大日本のびんぼう人さまではござりませぬか。どふやらむさくるしいなりと、やせこけてござるところ、まったくわれらみそんじではござるまい。さやうなれば、このくにへおあしをとゞめ玉ひ、どふぞびんぼうとやらをまもりたまはれ」

と、いんぎんにたのみけるにぞ、惣六はあきれはて、

「なるほどわたくしはおみうけのとふり、はくつきのびんぼう人はびんぼう人なれども、神ではござりません。そのびんぼうがいやさに、此国へわたりました」

といへば、かの唐人ふしぎそふに、

「アノそんなら、びんぼう人といふものは、わづか千両万両のかねもないかの」

ソ「ワハヽヽヽヽハヽヽヽヽハヽヽヽヽ。千両といふ大まいのかねがあれば、日本では大がねもちといふて、人もたて升が、わたしはたった百のぜにさへないことがふだんでござります」

【二ウ・三オ】

和「わしがせんぞの和藤内どのば、大みんこくのひきみんたんといふ所に店をもってござるから、ちょっとよって下さい。千里がやふのツイねきでござる」

のはない」

ソ「それはきめうじゃ。いてみたい」

と、そのよひそかに、つなぎたる小ぶね一艘ちょろまかして、これにとびのり、ちくらが沖のたゞ中へ、あてども浪に乗いだし、うでにまかせてこぎゆくほどに、いちねんのつうじけるにや、じゅんぷういで、自ざいこくへと吹つけられ、卜向ふをみれば、かいがん一めんに火のもへたつようなるを、よく〳〵みれば、ゑださんごじゅのはへたるなり。これは〳〵とあきれながら、ふねをこぎよせて、なんぼんあるにとかぞへてみれば、大ぼくてうど五ほんあり。惣ろくよこでをうちて、

惣「ハ、アわかった。九々のかづで」

落「さんごじゅ五本じゃ」

【三ウ・四オ】

【四ウ・五オ】

## 其二

さて惣ろく、そこらきょろ〳〵みまはせば、大石はみな水しゃう、めのふ石などにて、そこらまばゆく、きらめきわたり、いさごはきん〴〵をしきたるがごとし。さて陸に上り、すこしゆきてみれば、人家たてつらねて、いづれもべっこうのかはらに、柱はきゃら、じんかうの名木をもってこしらへ、これに五彩をほどこし、ギヤマンの格子あたりをてらし、其外ルリハウ七宝のしゃうごん。極らくせかいもこんなものであろふと思ふばかり、けっこういふばかりなし。もっとも小家は一ッけんもなく、くじゃく、鳳凰はにっぽんのにはとりのごとく、家〳〵にこれをかひ、また五こく豊饒にして、それも人のせはいらずに、ひとりでにはへ、きん〴〵もかしかりといふことなく、しごと、いふこともせず、きげんよく、めい〳〵すきなことをして、あそびさへすれば人にほめらるゝとは、さて〳〵かはった、あんらくな国もあるものと、きもたまをつぶし、そこら

## 翻印

叙

朝比奈は島々を巡りて、勇力にあら夷の鼻をひしぎ、桃太郎は猿が嶋に渉って、数多の宝を着服す。呉竹の世くだりて、和荘兵衛、夢想兵衛また万国を経回て、美名を鼻とともに高くせしを羨み、雁がとべば蟇も飛んだことから、コイツも真似を島めぐり。長者国からはじまり〳〵。

嘉永戊申　初冬仲澣　十方舎一丸識（花押）

和荘兵衛乗二白霍一経二一回一万国ヲ一之図

【見返し・序①一オ】

【序②一ウ・二オ】

## 発端はじまり

爰にむかし〳〵西のうみ、ちくらが沖にて吹ながされ、異こくのしま〳〵をめぐりて名をあげたる、かの和そうべいが掛もちのうらだなに、麁相惣六といへるなまけものあり。まださだまれる妻もなく、ぬらりくらりと油手でうなぎにぎるやうな、とりしまりなき男にて、ひとりもの、くせに、こんにちをくらしかね、どふぞぬれでゞあはのつかめる仕やうはござるまいかと、家ぬしの和そうべいかたへきたり。例のしり長くへたってゐるに、和荘兵へ惣ろくにむかひ、

「きさまはやもめぐらしこそ幸い。先ねんわしがいった自由自在国へわたればよい。それこそ、じゆうじざいこゝろのまゝで、そのうへ長いきして、千年もまん年もあそんでくへるぜ。わしもそのくにでだん〳〵しんせつにあふて、桃太郎ではないが、きん〳〵やいろ〳〵の宝をふねいっぱいもらふてもどり、其上その国の土地をふむと不老不死といふて、としもよらず、しぬといふこともない、大上郎国。たゞきげんよく、あそんでくらしさへすれば、人がほめる。ひよっと仕事でもすると、それこそ人まじはりができぬ。また芝居みせものは、むかふからかねをくれてみせるが、遊所もどふぞ来てくれい〳〵と、仲居やちゃ、のおとこが、向ふからこしや車もって迎にきて、ちそうをするうへに、あとでしこたまかねをくれて、またのりものでおくってくれるし、酒は池へわく。さかなは木になる。なんでもかでもほしいと思ふもの、ひとつでもないといふことがない。あまり十ぶんすぎるゆへ、どふぞひんぼうとやらがしてみたいと、それのみをねがひ、冨士や鷹のよふな日本でめでたがる夢でもみると、不吉なりと、しほみづをまつり、栄耀にもちぐさりの、ぶげんしゃばかり。なんとうらやましいか、どふじゃ〳〵」

ソ「ハテナ、そんなくにで住たい。あそんでくへるの」

和「しれたこと。仕ごとするものをごくだうといふて、つきあふも

版の覆刻改題本であろう。なお、名古屋市蓬左文庫には『落はなし宝野山』（無刊記）なる一本が蔵されるが、こちらは嘉永二年版から序の年記を削った後修改題本である。書名は、本文最終丁の挿絵に「宝の山」と記されていることからの命名であろう。ちなみに、本書が刊行された嘉永二年は、いわゆる天保の改革によって本屋仲間が停止していた時期に当たるため、版次状況などは不明である。

## 凡例

一、本翻印は、有志で行っている勉強会「古典講読の会」における成果である。翻印担当者は、奥田亜衣・金森麻実・金時輝・重本栞奈・内藤晴香（以上、国際文化学科四年）、北村恵・黒田真代・武政百合子（以上、国際文化学科三年）、高松亮太（本学教員）である。翻印は勉強会における基調報告を踏まえ、高松が修補したもので、一切の責任は高松にある。

一、翻印に当たっては、本文を原則追い込みとし、庵点が記されている発話については、読みやすさを考慮し、改行して記した。ただし、発話と判断される箇所でも、庵点のないものに関しては改行しなかった。また、本文とは別に独立しているセリフ部分は、適宜挿入した挿絵の下部に記した。

一、漢字は原則として通行の字体に改めた。

一、底本の句読点は全て「。」で表記されているが、読みやすさを考慮し、読点とすべき箇所は「、」に改めた。また、適宜取捨・増補を行った。

一、必要に応じて濁点・半濁点を補った。

一、促音・拗音は小書きで記した。

一、踊り字は底本のままとした。

一、庵点は全てカギ括弧（「」）とし、発話の末尾を閉じた。

一、発話者の表記は原本通りとした。ただし、発話者が明記されていないものに関しては、必要に応じて発話者を括弧（〇）に入れて補ったところがある。

【表紙】

年）、『臍の茶口』（嘉永四年〈一八五一〉刊）などがあり、噺本や滑稽本、なぞなぞ、判じ物を数多く手掛けている。

なお、一丸は一九との師弟関係をことあるごとに綴っているが、その真偽は未詳。ただし、本作でも登場人物の発話を記す際に用いられている、庵点の外側に話者を明示する表記法が、十返舎一九の噺本の特徴であると指摘されており、[2] 一九が噺本や滑稽本で用いていた表記法を意識していたこと、また一九の継承者を自負していたことは確かであろう。

表紙と見返しの画者である里の家（歌川）芳滝は、歌川芳梅に師事した大坂の浮世絵師で、天保十二年（一八四一）に生まれ、明治三十二年（一八九九）に歿した。役者絵・美人画・風景画を能くした。[3]

## 注

（1）中野三敏「談義本略史」（『十八世紀の江戸文芸――雅と俗の成熟――』、岩波書店、一九九九年）参照。この他『和荘兵衛』の影響を受けた作に、文行堂『絵本渡海物語』（安永七年〈一七七八〉刊）、山東京伝『和荘兵衛後日話』（寛政九年〈一七九七〉刊）、胡蝶散人『和荘兵衛続編』（嘉永七年〈一八五四〉刊）などがある。

（2）藤井史果「噺本に表出する作り手の編集意識――戯作者と噺本――」（『噺本と近世文芸』、笠間書院、二〇一六年）。

（3）日本浮世絵協会『原色浮世絵大百科事典』第二巻「浮世絵師」（大修館書店、一九八二年）参照。

（高松亮太）

## 書誌

○底本　高松亮太蔵本
○体裁　中本一冊
○表紙　摺付表紙　縦一七・一糎×横一一・三糎
○外題　「異国語（龐相惣六）／一丸戯作／よし瀧画」（左肩摺付題簽）
○構成　見返、序一丁、口絵半丁、本文十丁半、後見返（奥付）
○見返　「絵本千代の寿き／里の家画／梓」、背景に口絵
○序　冒頭に「叙」、末尾に「嘉永戊申／初冬仲澣／十方舎一丸識」、丁付はノドに「いこく序一」
○匡郭　四周単辺　縦一四・六糎×横九・八糎
○丁付　ノドに「一（～十一）」
○作者　十方舎一丸
○挿絵　本文全丁に多色刷りによる挿絵
○画者　十方舎一丸（ただし、表紙・見返は歌川芳滝）
○奥付　「仕入所／大坂平の町よどやばし西へ入／石川屋和助梓」（本願絵双紙）
○広告　奥付右に「手遊絵本類」「大坂小摺絵」「道中記」「折手本」および口上
○諸本　底本と同じ石川屋和助版が京都女子大学図書館に蔵される。また異版に、神戸大学社会科学系図書館および大阪府立中之島図書館に蔵される『異国譚（龐相惣六）』があり、奥付には「嘉永二年己酉正月／大阪書房／心斎橋南久太郎町西へ入／播磨屋伊之助／同南久宝町北へ入／伊丹屋善兵衛／松屋町久宝町北へ入／大和屋嘉兵衛」とある。刊記を欠く石川屋版との関係については、石川屋版の表紙と見返しを描いた里の家（歌川）芳滝が嘉永二年の時点で九歳であったこと、従来知られていた芳滝の活動が安政以降であったことに加え、版面の状況などから推すに、石川屋版は嘉永二年

県立広島大学人間文化学部紀要　13，114-122（2018）

# 十方舎一丸『異国語』――翻印と解題――

高松亮太・古典講読の会

## 解題

ここに翻印する『異国語』は、広島出身の戯作者十方舎一丸によって著わされた、黄表紙風の噺本である。梗概は次のとおり。

労せずして金を得られるような楽な暮らし望んでいた麁相惣六が、家主である和荘兵衛の助言によって自由自在国へと渡り、極楽世界を思わせる金銀財宝や瑞鳥に囲まれた世界に感激するも、価値観が正反対の自由自在国において貧乏人として崇められ、貧乏の伝授を頼まれたことに嫌気がさし、出し抜いてやろうと空飛ぶ船に宝を積み込み、空を飛んで日本へと帰国する。

以上の筋を「発端」「其二」「其三」に分け、それぞれに洒落によるオチを設けた落し噺三話によって構成している。

本作は、序文に「朝比奈」や「和荘兵衛」、「夢想兵衛」の名が記されているように、本邦における異国遍歴譚の中でも特に名の知られた朝比奈三郎義秀や源義経の島巡り・島渡り伝説、平賀源内『風流志道軒伝』（宝暦十三年〈一七六三〉刊）を発端として流行した遊谷子『異国奇談和荘兵衛』（安永三年〈一七七四〉刊）、その後続作である沢井某『和荘兵衛後篇』（安永八年〈一七七九〉刊）、あるいは『和荘兵衛』を粉本とする曲亭馬琴『夢想兵衛胡蝶物語』（文化六・七年〈一八〇九・一〇〉刊）といった先行する異国遍歴物を意識して著わされたものである。とりわけ『和荘兵衛』は上方を中心として多くの後続作品を生むなど、大いに読者の関心を集めたようで、主人公の和荘兵衛は本作においても過去に異国遍歴をした先達として、かつ主人公麁相惣六が住む長屋の家主として設定されている。[1]

オチは、「発端」が珊瑚の樹が五本生えていることを見た惣六が「九九の数で珊瑚樹五本（三×五＝十五本）」と合点、「其二」は屋敷の女中におかわりを拒否された惣六が理由を尋ねると「長者二杯なし（「長者二代なし」の洒落）」と返答、「其三」は自由自在国から日本に帰国した惣六が和荘兵衛のもとを訪れたとき、自由自在国に尻を据えればよかったのにという和荘兵衛に対し惣六が「尻を据えるとまた空穴（唐尻）になって難儀する」と返す、といういずれも洒落によるものである。ちなみに、「発端」のオチである「珊瑚樹五本（三×五＝十五本）」の洒落は、朋誠堂喜三二作・喜多川行麿画の黄表紙『文武二道万石通』（天明八年〈一七八八〉刊）にも用いられており、先行する草双紙を利用していた痕跡も窺える。

作者十方舎一丸は生歿年未詳。大坂で活躍した近世後期の戯作者だが、師と仰ぐ十返舎一九『東海道中膝栗毛』を意識して著した『滑稽道中宮島土産』（嘉永四年〈一八五一〉刊）の附言で、

> 嚮に予談合膝くり毛一編を著し、幸に行れたりとて、書肆その嗣編を乞ふ事頻也。されど予が貧生も筆業繁多にして、いまだそれを果さず。さるに去年神無月、不図故郷広島なる書房某より招るゝに依て、頓に一六の便船に飛のりしてくだり着ぬ。

と自ら記しているように、出身は広島である。著作は他に『浮世談合膝栗毛』（天保十五年〈一八四五〉刊）、『手妻早伝授』（嘉永二年〈一八四九〉